

総合教育会議

日時：令和 6 年 8 月 29 日
10時00分～11時10分
場所：市役所本庁舎 2 階
特別会議室

（事務局）

ただいまから、総合教育会議を開催いたします。

会議に先立ちまして、事務局からご報告いたします。本日の会議の出席者につきましては、お手元の名簿と配席図をもって代えさせていただきます。なお、本日の会議には、調査検証チームより寺脇座長と、松雄副市長が関係者として同席しております。それでは、ここからの進行は、本会議の招集者であります河村市長にお願いいたします。

（河村市長）

はい。ありがとうございます。おはようございます。

今日は、教員団体からの金品の授受等に関わる調査検証チームからの最終報告ということだから、議題というか、この総合教育会議というのは議決するところではないということになっておりまして、市長側と教育委員の皆さんとの意思疎通をしっかりと図るとするのがその趣旨でございますので、そのテーマになります。

お見えになりますけど、寺脇座長さん始め皆さんには、僕からすると、正に私自身もこれ市長やらしてもらって10何年になりますけど、全く想像を絶する事態のことですね、金品授受を7年間で2,000万ということ。それから、名簿を出しとった。それから、幹部の方に上覧と言いますか、そういうお伺いというふうに誰が見ても取れますよね、ということを繰り返しとったということにつかまして、鋭意、色んな調査をやっていただきまして、ありがとうございます。

また、皆さんのご意見を聞くということですが、僕の意見を。僕はとにかく、本当に悲しいことですけど、一人の子も死なせない名古屋でやってますけど、特に今年なんかは、毎月のように不幸が起こってるわけですね、自ら命を絶つという状況が続いてってですね。これ何遍も言ってますけど、教員側から提案をいただいたことはゼロなんですよ。15年間も市長やってますけど。子どもが亡くなるというのは、それは市長の責任ですよ、これ。それから教育委員会だって責任重いですよ。それから校長の責任は極めて重い。これはどうしたらええかという提案が何にもない状況で、こんなことが行われとったと。2,000万

ですか。それからこれでよろしいかと。僕からすりゃそういうことを、子どもの自殺を無くすために、教員、特に校長ですわね、この辺が皆で集まって、市長がここはこうしようと、ここはやっぱ無理だとかですね。そういうのが出てくるような体制になってもらわにゃいかんのにね、それに熱心な人が校長さんになってもらわないかん。多分10,000人教員がおりますけど、ほとんどの方はそういう気持ちのある方だと思いますよ。だけどそういう人達の声が表に出ずに、こんなことで人事が決定されとったと。具体的にはないということになってますけど、皆さんに言ってあんまりいかんもわからんけど、これは当事者に聞いてますんで、これ自白するわけねえ訳ですよ。私は校長になったのだけど、実は初めダメだったけど、誰々先生に頼んだら校長になれました言ってですね。刑事訴訟法にも反します、そういうやつは自白の強要みたいなもんで。

まあしかし、そういう状況の中で、大変ご努力をいただいてありがとうございますということと、今後どうしていくかについては、非常に重い十字架を、チームの座長さん始めいただいた提言もありますしね。思っておりますんで、その辺ちょっと私から言いたいことは言っていないかんもんですから。めちゃくちゃなことをやってもらっとったらいかんけど、めちゃくちゃなことやってもらっても、子どもがみんなですね、本当に一人も死なずに自分の好きなことをやってく、名古屋の学校で。みんなそれぞれの道を歩んでってくればそれでいいんですよ、それは。めちゃくちゃなことを推奨する訳ではありませんけど、肝心なところは、そっちの子どもの人生の方であってですね、その辺をちょっと私の冒頭、意見を言わさしていただいたということでございます。

時間もございませんので、早速、座長の寺脇さんの方からご報告をお願いしたいと思います。

（寺脇座長）

はい、おはようございます。この問題についての調査検証チームの委員、その中で座長を申し付けられました寺脇でございます。

私ども2月の終わりに発足をいたしまして、今日までちょうど半年ずっとこれを見てきた訳で、詳しくはここに書いてあるとおりですけれども。

正直、最初私がこれを引き受けた時には、名古屋市の人事任用制度が普通の教育委員会と同じだと思っていたので、その同じものの中で何か特別な問題が起きた話かなと思って、それを解明するのかなと思って調べ始めてみると、非常に特異な制度になっているということなんですね。

だから名簿、金品授受、内覧っていう三つのことは、もう根絶宣言をしてもらいたいというふうには言っていますけど、その背景にあるのは、三役制度という聞きなれない言葉がありまして、それが学校を運営していく時には、校長、教頭、教務主任が三役であるって言うんで、もうびっくり仰天したんですね。

なぜかっていうと、教務主任というのは学校の運営をするのではなくて、授

業がきちんとできているのか、教育はきちんとできているのか、そっちに全力を注いでもらわなければいけない人が、あたかも準管理職みたいな扱いになっている。これでは、もし授業の内容に専心してもらえば、もっと良い授業ができるはずではないかということ。

それから、教務主任の試験があるっていうのも、全国では稀なことだと思いますけど。普通は学校の中で、校長がその学校の中のベテランっていうか、それなりの経験があって、それでこの学校のことも子ども達の様子も、この地域社会はどんな地域社会かっていうのをある程度、外からきたとしても、何年かやって知っている人に、校務分掌として教務主任の役目を振り当て、それを教育委員会が承認して任命するわけです。校務分掌というのは教務主任だけではなくて、生徒指導を担当する人とか、保健を担当する人とか、保健って保健体育の保健ですけども、それを担当する人とか、役割を振る訳ですよ。そのうちの一つっていうのが普通のところなんですけれども、名古屋市の場合はその教務主任になるために任用試験みたいなのがある。そうするとその実態を見てみると、それに合格したら、今までの勤務校じゃない別の学校に行くのがほとんどで、だからつまり、どの学校の教務主任さんも、最初来たときは何にもその学校のこと知らないで4月からここへ行きなさいって。これではまず、教務主任自体の機能が十分に発揮できていないじゃないか。

そして、また三役っていう段階があって、教務主任にならないと教頭にならないという仕組み、これもびっくりしますが、先ほど市長がおっしゃった子どもの命を守る、あるいは自殺をさせないというのは、生徒指導を一生懸命やってる先生が力を発揮しなければいけないんだけど、生徒指導主事一筋でやってる人は、教頭にも校長にもなれないっていう仕組みになっているじゃないかと。これは本当におかしい。教頭や校長を任用試験するのはどこでもやることですけれども、1点じゃないかと。

さらには、そういう制度をすれば普通のところより忙しくなっちゃいますよね。三つの任用試験をやらなきゃいけないっていうことになってしまえば、単純に言えば1.5倍忙しくなるとかいうようなこともある。

だから本来は、現象として起こっている名簿とか金品とか内覧というもの、これはもう全部問題のあることですからやめるとして、じゃあそれをやめれば全て解決するかということではなく、そういった人事行政の構造というものを変えていかなければならない。

それから、もう一つ驚愕いたしましたのは、その人事を担当するのが全て教員の方々が教育委員会に入っておやりになる。事務職員は一切関与していない。これも類例を見ない話であって、確かに教員が教員を見るのが一番いいとしても、そういうことに偏りが無いとか、疑義を差し挟まれるのがないかとチェックする機能というのは、有能な事務職員を配置することによって可能だし、それからもう一つは、とにかくすごい重労働になっているとか、だから差し入れ

をせんといかんって。お金の使い道の中に事務経費として使ったっていうのがある訳ですけど、事務経費はちゃんと公費で出る訳なんですけど、恐らくは日本全体でも学校の現場の先生っていうのは、自腹を切るっていう習慣があるのは、自腹を何で切るかって言うと、その手続きがものすごく先生にとっては難しいことなので、これ出して帰りの終電がなくなったらタクシー使えますって言ったら書類を書かなきゃいかなので、そういうのが馴染んでないから、そんなら自腹でっていうのでやってる。で、今度の場合はそうやって皆さんがカンパしてくれた、貰ったお金があるからここから使おうみたいなことでやってた。これも事務職員がそこにきちんと配置されていれば、そういうのは事務職員の得意とするところですから、それによって事務が軽減されて、そんなに重労働ではなくなるっていうこともあるんですけども、これも非常におかしいと。その根本のところを解決しない限り、そのさっきの三つの問題点だけやめましようって言うっても終わりませんよっていうのが、全部調べ上げたうえでの判断ということでございます。

私達に求められたのはそこまでだとは思いますが、あえて、この概要版で言えば、5 という数字が書いてありますけれども、その再発防止策としてこういうことが考えられるのではないのかと。これはもちろん再発防止策は、教育委員会がきちんとお決めになることではありましようけれども、こういうところを正せば良いんじゃないかということで、要すれば今申し上げたような、非常に変な制度というのを、普通の教育委員会でやっているような形に正していけば良い。

例えば、確かに校長・教頭だけでは回らないっていうのは、最近の学校っていうのは非常に色々なことを抱え込まなきゃいけないですから、昔のように校長・教頭だけでは支えきれない。だから三役っていうふうになっていったのかもしれないけれども、それはきちんと他所では副校長とか、教頭を2人配置して3人体制にするとか、あるいは主幹教諭という新しい制度がありまして、名古屋市でも導入はしているんですね。だけど、二百何十校のうち17人しかいないっていうのは、これ何の為かっていうと、非常に問題のある学校の応援みたいな形で言っているんだけれども、これをきちんと主幹教諭として位置づけるっていう、全校に配置するっていう考え方もある訳で。そういうことをヒントとして、こういうやり方も考えられますよっていうことを述べさせていただいております。

概要版には載っていませんけど、この報告書の最後に私達5人の思いをまとめまして、85ページ以下ですけれども、結語っていう欄でこの半年間、名古屋の教育、あるいは名古屋の問題と向き合ってきた結果、私達5人が抱いた所感というものをあえて、付記させていただいております。

とりあえず私の方から以上でございます。

(河村市長)

はい。ありがとうございました。

そしたら次に、事務局の代表としてメンバーに加わっておいりました松雄副市長からお願いします。

(松雄副市長)

本来であればこの問題につきましては、教育委員会の問題でありますので、教育委員会で色んな調査をするのが筋ではございますけれども、この検証チーム自体が総合教育会議の中で設置を決めたということ、それからこの際、徹底的に膿を出すと、子ども達の教育に邁進すると、そういう役割がありましたので、あえて私が事務局としてこのメンバーに加わったといったところが経過でございます。

私は検証チームのおっしゃられた検証がスムーズに進むように、教育委員会事務局を指導いたしまして、隠すことなく求めに応じた資料をきちっと作るというのが、私の役割だというふうに肝に銘じて、今回メンバーに加わったということでございます。

調査報告書にも書いてありますように、2月21日に第一回を開催いたしまして、8月28日、昨日でありますけれども、報告書をいただいてということになります。

その間に関係者からのヒアリング、教育団体へのアンケート調査、それから市民の皆さまからも多数のご意見を頂戴したものですから、それら全てに対して目を通しました。そして、全体としては276人・団体の方々にヒアリングを実施したということでございます。

弁護士の先生方につきましては、公式的には13回の会議ではございましたけれども、かなりの時間を割いていただいて、一人一人に面接をしていただいて、場合によっては複数回面接をしていただいたというような形で、今回の報告を取りまとめましたので、一部調査不足ではないかといったご批判はあることは承知をしておりますけれども、調査検証チームとしては精一杯、あらゆる手段を使って調査をして報告書をまとめたということにつきまして、この場で報告をさせていただきます。その際、全体を主導していただいた寺脇先生には深く感謝申し上げたいというふうに思います。

そして、再発防止策をあえて6点書いていただきました。本来であれば、なぜこういう問題が起きたかということに対して、報告を求めればいいんですけども、あえて6点の再発防止策の提言もいただきましたし、さっき寺脇先生がおっしゃられました最後に「結語」という形で、このメンバーのメッセージを取りまとめていただきました。

寺脇先生は申し上げてらっしゃいませんでしたけども、結語にあたりましては、最後の最後まで一言一句、委員の方々の思いを凝縮するという形で、何度

も何度も修正をしまして、ぎりぎりまでこの結語にどういう思いを込めるのかということを読めた訳でありますので、どうか教育委員の皆さまにも最後を読んでいただきたいなというふうに思っております。

今回、提言をいただきましたので、今度は、私どもはこの再発防止策に全力を挙げる必要が出てくるというふうに思っておりますので、これは教育委員の皆さまのご指導、それから率先垂範、そして予算も絡みますし、組織もありますので、長側との協力も十分必要なものですから、ここからは私ども長側と教育委員の皆さまともよく議論をしまして、速やかに改革を実施し、子ども達の教育に邁進できるような体制を作りたいというふうに思っておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。以上でございます。

(河村市長)

はい。ありがとうございます。

そうしましたら、教育委員さんのご意見を伺うということで、順序は一応定まっておりますので、まず順番で鎌田さん、中谷さん、栗生さん、山本さん、水野さんと、そういう順番でご発言をいただくということになっておりますので、鎌田委員の方からまずお願いします。

(鎌田委員)

教育委員の鎌田でございます。

色んなご指摘がありましたし、今回こういう問題が起こって、教育委員の一人として大変恥ずかしく、また申し訳なく思っております。もちろん、私どもは非常勤取締役のような形でありまして、全員本業がある中で限られた時間で、この教育行政にできる限り関わっていききたいと、そういう気持ちでやってる訳ですけれども、我々の預かり知らないところで、こういう問題が起こってしまったということですね、本当に裏切られた気持ちでもあります。

なぜこういう問題が起こったかというのですね、私は常日頃、教育委員会の中で申し上げてるんですけれども、教育委員会事務局には大きな三つの問題があるというふうに言っております。

それはまず、公平・公正性が欠けている。二つ目、透明性が欠けている。

それから座標軸に、本来であれば、生徒児童、市民、X軸Y軸のゼロをそこに置いて、それで物事を判断していくべきにも関わらず、独自の論理がまかり通ってしまうような世界を作り上げてしまっているのではないかと。一言で言うと、市民感覚からの乖離、逸脱といいますか、そういうことがこの問題を引き起こしてしまうことになったのではないかと。というふうに思います。

ぜひこの教育委員の発言の後にはですね、事務局の方からこの答申といいますか、今回の提言といいますか、このお言葉を受けてですね、そして、この報告書を受けて事務局はどう考えるのかということについても、ぜひ意見を聞か

せていただきたいというふうに思ってますけれども。

事務局がですね、今回の問題が起こって、半年ほど前でしょうか。テレビとか新聞で、これは金品は受け取ったけれども、これは激励として受け取ったんだというふうに考えてると、そういう発言があったというふうに思います。どこまで正確かってことは別にしまして、そういうふうに私は理解しておりました。ただ、激励といいますとですね、民間企業で言いますと、上司が非常に苦勞している、新しいプロジェクトでよく頑張った。そこに偉い人が降りて行ってようやってるなということで激励する、あるいは選挙の時に陣中見舞いするというふうなことで、激励というふうな言葉が使われるのではないかとというふうに思いますが。その時に人事の名簿を持ってきますかと。激励するときに。それが無いから単純に激励と、純粋な激励ということになるのではないかと。激励だと受けとめておいて、実際その人事の名簿まで受け取ってると。そこには言及しないと。

元々お金が、原資がどこにあるかということについては、私の記憶では、最初は組織からきたものもあれば、個人で出したものもあると。つい最近、我々が説明を受けたのは全額個人でしたと。よくそんなことを確認できましたねというふうに思うんですが、いずれにしてもですね、民間でも例えば政党に献金をするということがあります。これでその見返りを期待しないかと。見返りを期待しなかったと言ったら、当然のことながら見返りを期待するからお金を出す訳ですね。

見返りが無いということであれば、それは株主代表訴訟になりかねない。要はなつて当然ということになる訳で、必ず何かしらの見返りがある、あるいは見返りを期待されてるということになる訳でありまして、同じことは当然ここでもある訳です。もちろん全体の異動対象に対する今回の名簿の提出がされてる比率というのは非常に高いということではありますけれども、それでもやはりその金額にも多寡はあるでしょうし、当然のことからそういう記載があると。

そこで、例えば自民党がですね、その政治献金を受けて、それによって政策が変わったことは一切ありませんというふうな発言をしてることがありました。しかし、これは本当にそんなことあるのかということでありまして、惻隱の情といいますか、憐憫の情といいますかですね、そこで事を荒立てて、それでまた波風立てるよりも、静かにしといた方がいいというふうに献金側も思ったからということじゃないか、というふうに私は推測する訳ですけども、いずれにしても必ず見返りはある、なくても期待をしているということではないかというふうに思う訳であります。

それから、先ほど申し上げましたちょっと前後しますけれども、透明性がないとか、生徒児童、市民、ここを座標軸に置いてないということ、それから公平、公正性、それはですね、例えば一つの例ですけども、名東区の子供生徒が自死をしたケースがありました。その時に、教育委員会として第三者委員会

を立ち上げて、そして学校が問題なかったというふうな結論になったというふうに私は理解しておりますけれども、それはいくらなんでもおかしいだろうということで、調査検証委員会というのを立ち上げられた。その結論は全然違う訳です。全然違うにも関わらず、教育委員会の事務局の上層部の方がですね、いや、言ってる内容は全く同じでしたと、そういう発言をしていたんですね。もうあり得ないではないかというふうに思う訳です。いかにこの市民感覚から乖離しているかということです。

また、教育委員会としても、これを見直していかなければいけないところが多々ある訳です。先だって、給食事業で談合事件がありました。これについて私はですね、教育委員会の中でコンプライアンス課とかですね、そういうものを立ち上げたらどうだと。もとより、例えば入札、色んな建築案件で入札とかがある訳ですけれども、そこで落札されている金額の比率というのが非常に高いケースが多いと。それをどうやって是正していくかと。この直近のところでいきますと、今資材が高騰しているとか多々ありますけれども、一般論として、建築案件での談合を見極めるというのは難しいと言われていると思います。でも、この給食業界のやり方っていうのはですね、非常にまだまだ初歩的なやり方をやってたように私は見受けられました。従って、これ立ち上げたらどうですかと、民間企業からそういう目を持った人、あるいは私だってそれできない訳ではないかもしれませんが、そういうふうな提案をしたんですけども、結局それについて、ではやってみましょうというふうなことは、全くありませんでした。

そうした中で、変なところに事務局としては正義感を持っていまして、先だって給食を担当する人がですね、食材を持ち帰ってしまったと。中には期限切れなものもあるし、期限が切れてないものもありましたけれども、金額は非常に些少、僅少なものでありました。しかし、それに対して一度、事前勧告しているということもあり懲戒解雇。そして、長年勤めた方ですけども、退職金を支給しないというのを事務局として結論出されて。そして、それが裁判になって、そして敗訴したということがありました。それをまた控訴したいということですけども。それを最終的には最高裁まで行くんですか、そこまでの覚悟はあるんですかと。それと同じようなレベルでこの他のことについても、事務局はみんな公平公正に見てるんですかと。例えば、今回の金品授受についても、これは全然問題ないんですかと。お金を貰って、一言で言いますが、これはどう見ても裏金以外の何物でもない訳です。この裏金をもらっておきながら、あるいは裏金と等しい付け届けと言いますか、そういったものも激励、括弧つきの激励ですけど、として貰っているということでありましてですね。その中に例えば煎餅があれば、饅頭があれば、煎餅1枚饅頭1個食べたら同罪。それだけ厳しく給食従業員を指南するのであれば、やはり自らそうやって襟を正していくべきではないのかと。あたかも市役所、教育委員会にはですね、1級職

員と2級職員がいて、1級職員はお互い傷を舐め合っているんだと。1級職員から見て2級職員、そういう表現が正しいかどうかと別にしまして、あたかもそういうふうに考えていて、そこはもっと厳しく追及しているんだというふうな印象を与えかねない、そういう発言でありました。非常に遺憾に思います。

私が教育委員に就任してから、例えば、この教育委員会の中の書類一つとりましても、誰が作成したのか、いつ作成したのか、どこでその書類が終わっているのか「以上」とか、これを必ず書くようにしてほしい。何年何月何日、どここの部署の誰がこの書類を作ったんです、どこでその書類が終わってるんですというようなことを明らかにして欲しいと。これはもう民間企業では初歩の初歩である訳ですね。しかしそれができてない。

しかし、この公務員の無謬性とかですね、前例踏襲性とか、そういうふうなことで、今日は昨日の延長、明日も今日の延長というふうなことでやってきて、結果として色々と膿が溜まってですね、こういった問題に繋がってきていると言えるのではないかとというふうに私は思う訳でありまして、この際、徹底的に見直して、いかに襟を正してですね、この組織を、あるいは組織の運営の仕方、経営の仕方、これをどうやって変えることができるかということについて、これは市民の方々のご納得いくような形で示すことができないということになればですね、これはもう本当に事務局の中にも正しい方はいらっしゃると思います。しかし、これはもう全部ですね、辞めていただいて、新しい方々に変わっていただくとか、そのぐらいのことをやっていかないとですね、これはもう本当に座標軸を市民に置いて、公平、公正、透明、こういったことは担保できないんじゃないかというふうに思う訳であります。

例えば、それから今回こういう校長・教頭、それから教務主任、この三役の考課・評価について、これが今の制度では年に1回なんですね。そうするとですね、穿った見方をすれば、直近多額の金額を持ってきたところの推薦する人にはですね、それは良い点を付けてあげましょうと。良い点を付けると必然的にそれは昇格に繋がる訳ですね。民間ではですね、そういうことがないように、もちろんこれは会社によって違いますけれども、例えばですが、直近の評価・考課というものは、100点満点のうち50点をそこに充てます。1年前は例えば30点。その配分はいくらでも変化形がありますけれども、そういうふうに結局ある時に、急にということはないかもしれませんが、やはり1年だけの評価で、それで昇進してしまう。これ年収が随分変わってくるんじゃないかと思うんですね。一般的に年収500万で40年間勤めると2億円です。これがどの役職につくかによって、これが変わってくるというようなことがありまして、非常に大きな、重要な問題なんですね。もちろん教育が大事ですから、教育に力を入れていただくと、一人も死なないようにすると、本当にこれが一番大事なことですけれども、しかしそこにですね、この間違ったそういう評価・考課というもので、それを割り振ったそういう方々も裏ではいたことになるんじゃないか

というふうに、推測はされるということでありまして、もうこれ断じて許すことはできないと思う訳であります。

そうした中で、対策として色々ご提案いただきましてありがとうございました。まず、決別宣言これは出すべきだと思います。

そして、強力なコンプライアンス対応部署というものを、そういう部署を作るべきではないかというふうに思います。そこにはですね、例えばトップに民間の企業からきていただくとか、一般市民代表にも入っていただくとか、それから、これは民間企業にはありますけども、コンプライアンス、この通報制度ですね。今度、新しい制度ができたとして、そこに悖る行為がありますよということになればですね、これは事務局に知られないような形での通報制度というものを構築するということも必要ではないかと。

もっともっと本当に座標軸を市民、生徒児童ここに置いてくというふうなことにするためにはですね、もっともっとその外の空気を吸っていただく必要があるんじゃないか。したがって、この職員の方々、公務員の方々にですね、民間企業に行って、民間企業は何やってんだというふうなことについて学んでいただく。民間企業からも教育委員会にきていただいてですね、どれだけこのずれてるのがあるかということについて見ていただくと、現状のままでいきますと、教育委員会の常識は、世間の非常識ということになるんじゃないかというふうに思われてですね、そこに身を置くものとして、非常に恥ずかしく残念に思う訳であります。

したがって、これを契機に何としても徹底的に大きな改革をしていかなければいけないというふうに思う訳であります。以上です。長くなりまして申し訳ありません。

(河村市長)

そしたら次は中谷委員さんをお願いします。

(中谷委員)

教育委員をしております中谷と申します。

まずですね、今回の件に関わりまして、2月から8月までの13回にわたって、先ほど276人ということでしたが、81名33団体ですかね、大変多数の方に聞き取りを丁寧にしていただいて、これだけの膨大な資料を、また公開されるものと思いますけれど、提供いただきました件、詳細な検討をいただきましたことをお礼申し上げます。

本件は、20年以上も前から教員団体86のうち69が金品提供という事実があり、市長からもありましたように2,000万円もの金額が、隠蔽的に使用されていて、かつ、教育委員会内部でも、教員出身者と行政出身者で情報が共有されていない、隠蔽されていたという大変問題のある件です。

私が問題提起させていただきたいのは、このようなどこから見ても不正であり、不適切な扱いをなぜ行っていたのかという原因についてです。いわゆる誰が得をするのかということです。

調査委員会の結果では、名簿と突き合わせていただいた結果、明瞭な関係はないということだったのですが、私はこれは少し異論がありまして、見えない形であったに違いない。検証が非常に難しい形で、その団体がそういう形で配慮を示したということ自体は記録に残る訳で、その歴史を紐解けば、影響が検証できないにせよ、あったことは間違いないだろうなど。そういう目でこれから市教委としては考えていくべきだと思います。

この誰が得をということと言いますと、私は一つ答えがほとんど明らかだと思えますが、いわゆる教職員団体の中での権威関係の維持ということにあると思います。つまり、明瞭に誰が得をするということではなくて、教員関係の中でお金を出す側と受ける側があれば、当然受ける側はそれに対して従う、お腹を見せるようなことになりますし、受け取る側はそうかそうか苦しゅうないということに当然なる訳で、そういった権力関係を確認する儀式になっていたと。ややおぞましいということちょっと強いでしょうか。

最終報告書に虚構の権力構造ということがありましたけれども、私、教育心理の専門の立場ですので、規律の維持、強化ということがそこにあったと。つまり、分かったか、はい分かりましたと、こういう関係を毎年やっていけば、それはビシッとこう引き締まるだろうなど、言うことをちゃんと聞きなさいよ、聞きます、だから次はよろしくお願いしますということに当然なるだろうと思います。ですので、こういう形で、結局ギブアンドテイクとして機能していた面を無視しては今回の件は検証できない。

背景ですけれども、座長から先ほど説明いただきました様々な制度の部分で、名古屋市独特のものがあるということでしたが、まさにその点であって、都市規模がこれだけ大きく、学校数が非常に多く、かつ、この地域は私が思うには、比較的日本の中でも閉ざされた、閉じた大都市だと思うんですね。横浜であるとか、千葉であるとかいった関東圏に比べ、そして神戸であるとか、大阪であるとか、奈良であるとか、京都であるとかといった関西圏に比べ、そして福岡であるとか九州北部に比べてですね、あるいは仙台のような、東日本を一つまとめるような地域に比べて、比較的、愛知県や東海3県、4県で、全てが閉じているというところがありはしないかということです。

私自身も、研究者として現場や色んな学校と、全国の学校と関わりがありますけれども、その点は自分の肌感覚では感じるところです。名古屋市の学校の考え方や価値観というのはやや独特だなということです。その点がですね、例えばこういう立場になって色々伺っていきますと、行政職員との交流の少なさや他都道府県との情報交換の少なさ、独自のルールを重視するといったことがある意味、機能的に働いてきた結果が、20何年も隠蔽してきたという結果に

なったのではないかということです。

もう一つ、最近ですね、8月23日にあった他都市の例を考えてみたいと思います。横浜市の事案です。いじめの不適切対応で8名、そしてわいせつ事案への裁判動員で、18名の大量の市教委の懲戒者がありました。退職者も含みます。これだけのことがあって、こんな信じられないような動員というようなことがあって、報告書も未だに目を疑いますけれど、本当のこと言っているのかなというふうに思いますが、これぐらいのことをしている同じ政令市があるので、それぐらいの覚悟でやらなければ、膿が出るということはないだろうなど。市民から見て、やっぱり結局しゃんしゃんで終わるんだなというふうに言われるでしょう。そこまでの覚悟を持つべきだということです。

最後に対策、改善の案についてですが、人事制度が一番根本です。併せてですが、今回は古い教職員集団の常識を、ここまで大事に隠して維持してきたことに病巣がある訳です。つまり、教職員集団の独特の倫理観や考え方を打破しなければいけないと。翻って考えれば、今のいわゆるブラックであるとか、やりがい詐欺であるとか言われる学校教育の環境が、そういった力関係を維持してきたのではないのでしょうか。

名古屋市だけでも、例えば残業代が出ないとかですね、あるいは結局、授業時数が減らないとか、そういったことを変えるように、名古屋市が率先して反省し、普通に頑張っている先生方が報われるような環境を作らなければ、今回のことが生きた意味にはならない。

一番信用を失ったのはもちろん市民ですけれど、私は同時にというか、それ以上と言ってもいいぐらい、名古屋市10,000人の教員の方の信頼を失ったと思います。いみじくも結語にありますように、学びのコンパスであるとか、なごやこども応援委員会であるとかいったことが、市民だけではなく、現場の教職員には白々しく見えるのではないのでしょうか。そこまでの覚悟を持って、これから市教委として取り組んでいただくことを希望いたします。以上です。

(河村市長)

ありがとうございました。

そうしたら、次は栗生委員にお願いします。

(栗生委員)

栗生です。よろしくお願いします。

まず初めに、私も教育委員を任命いただいて、今2年が過ぎたところでございますけれども、本件、半年前の新聞報道で知ることです、職務をいただきながら、そういった結果になったことをまずお詫び申し上げたいと思います。

一方で、名古屋市民として子育てをする保護者としてはですね、名古屋市の

教育に非常に満足しておりました。トワイライトスクールといった形で、子どもが授業終了後、学校内で保護者が仕事が終わるまで預かっていただく制度があったり、あとスクールイノベーション、学びのコンパスということで総合探究学習にも民間の新しい考え方も取り入れながら、いわゆる教育面での進化というところは大変満足しております。

一方で、今回のような、本件で言いますと、私ども民間の立場からすると、現場といわゆる本社の運営の乖離があったんじゃないかというふうに感じました。教育現場ではしっかり指導していただいているものの、いわゆる本社組織としての今回のガバナンス、コンプライアンスというところが課題でございます。民間の意識で言いますと、いわゆる現金や金品を預かるということは、日常生活の中で非常に怖いことだと理解しています。お金であれば、しっかり経理財務課に報告をして、いわゆる現金や物品を受け取るのではなく、履歴が経理システムに残るように、入出金を確認するということが一般的であります。そういった中、金品の授受を現場で行われ、本社というか教育委員会というこの組織の中で行われたこと自体に非常に驚きました。

かつ今、令和という時代にも関わらず、現品での受け渡しに驚いております。

実際に使われた使途として、飲食、会合費、タクシー、そして弔辞におけるお供えなどの使途っていうところで出ておりましたけれども、この辺りも、本来、寄付的な扱いであれば、例えば教員の勉強会や研鑽のために使われているのではないかと思ったところ、残念ながら飲食、会合で使われたということも非常に驚いております。

今後の再発防止という意味で、人事面と、いわゆる民間的に言う財務経理面というお話でさせていただきますと、今回の金品の使途に関して、教育人事システム、集金システムの維持に使っていたというふうに報告書にありましたが、じゃあシステムどうなっているんだろうかを見たときに、いわゆるその人事のシステム、金品のシステムとして、しっかりとしたデータ管理は現場ではなされておられません。が故にですね、お金の入出金の管理はもとより、人事面で言いますと、いわゆる非常に定性的に人事評価がなされております。

通常、民間であれば、経年評価ということで、学校の異動及びそこでの学校の評価とその時の配属時の先生の評価、そういった総合的に定量的に評価される訳ですけども、現在のこの教育委員会の組織であるとどうしてもこの定性的かつ属人的に評価がされており、今回、調査検証委員会の皆さまにもご苦労かけたと思うんですが、非常に調査が難航したかなということが想定されます。

今後の改善として、市教委として、私ども教育委員もですね、やはりその属人的、かつ同質的な中の違和感をしっかり外部の意見として、お出しできるようにしていきたいと考えています。その為には、教育委員のこの会議体のあり方、一方的に報告を受けて議論するというよりは、報告を受けて確認することではなく、大きな議案については、例えば予算の計画については、期初

と期末だけではなく、四半期ごとの入出金のお金の流れというところを、しっかりいわゆる企業で言う経営会議のような形で見させていただくっていうところを進めていければと思います。

ということで、この度は大変申し訳ありませんでした。ありがとうございます。

(河村市長)

はい。ありがとうございます。

そしたら山本委員にお願いいたします。

(山本委員)

はい。教育委員をさせていただいています山本です。この度は色々ご迷惑かけまして申し訳ありません。また、調査委員の皆さんには6ヶ月にわたり、時間も労力もかけていただいて、たくさんのことを調べていただき本当にありがとうございました。

私は教員出身なので、教職員の世界っていうのは何となく分かる部分もあり、教職員のほとんどの方々が、一般企業に勤めることなく公務員になり、教職に至っていると思います。もうほとんどだと思います。その中で、結局、学校を卒業してそのまま学校に入るという流れになります。ですから、何の疑いもなく、慣習・慣例みたいなことを悪いこととも思わず続けていってしまうという、よそからの当然の知識とかなく、これが当たり前と思って進んでいってしまうということに一番問題があるんじゃないかと思います。私ももちろんその中にいて何の疑いもなく、言われたことを言われたとおり、今までやっていたことを学んでいくというのをやっておりました。そして、今自分が会社に入りまして、自分がいた世界が本当に狭い世界だったんだということに気づきました。

金品授受におきまして、もし現在の会社で、一般の社員、管理職という区分もありますが、そういう人たちが、会社が知らない中で他の企業さんだったり、取引先の皆さんだったりに金品の授受をして、会社がそれを知らなかったということになりましたら、もう大変なことになります。当然、懲戒免職だっであることだと思うんですね。それが激励だったというような言い方で済んでしまうということ。それと使用に関しても、激励を超えること、激励のお金としてではないことに使われていると思いますので、そこはもう私は教員出身なので、悪気があったとか、自分たちが私腹を肥やすためっていうふうには使っていないと信じたいんですけども、でも良いか悪いかって言ったら絶対に悪いですし、それが悪いことだということ、一般市民にとってはほとんどないことだっていう認識を、教員出身の皆さんだったり、教員の皆さんが持たなければいけない。そこにも、一般の世界との乖離があるということは、事実で認め

ていかなければいけないし、変わっていかなければいけないところだなっていうことを感じております。

また、名簿に関しては、始めは選考の一部で考えていた、でもそのうちに、そうではなく全然関係ないものになっていったっていうふうに書かれていましたけれども、であれば名簿を受け取る必要は一切なかった訳ですし、そもそも名簿が一部団体からしか受け取らない、受け取っていなかったっていうところに非常に問題があり、これが全団体からの広い門戸を持ってやる、そして全地域、そして、誰もが提出できるっていう仕組みであれば、また違ったのではないかと思います。ただ、名簿にこだわっている訳ではなく、人事の仕組みがしっかりとしていけば、このような名簿は全く必要ないと思われれます。ただ、名古屋市っていうのは非常に大きな団体でありまして、教員もたくさんおり、人事も非常に大変だと思います。その人事を今システム化された中で、点数化をされて、選んでいるとは思いますが、やはり人を扱う職業である訳なので教育というのは、人に対する職業だと思うんですね。そこで、ただ点数化されたものだけで、人事が決められるかという、多分私は網羅できてないんじゃないかと思うんです。そこで、人となりみたいなのところも評価して、人事が行われなければいけないので、今の段階で人事を決めている人数と、候補者にあがる人数とを考えると、絶対にそれが見えてないと思うんですね。そうするとどうなるかという、見えている人を選んでしまうっていうことになりかねないと思うんです。ですから、そこは名簿にこだわっている訳じゃないんですけど、何かの仕組みを作って、例えばもっと小さな団体を見る、例えば区ですよ。区を見れる人達を選出して、その人となりが全部分かる、そして点数化されたものがあるというような仕組みを作っていかなければ、結局は見えてる人だけを選出してしまうことになるんじゃないかと思っておりますので、その仕組みを変えていくべきかなと私は思っております。

やはり現場で働く先生方、私も自分の友達もいっぱいいますし、自分の子ども達も市の先生方に教えていただいて、何の問題もなく、とても今でも感謝している状態なんですけれども、その先生方のためにも、頑張りを無にしないためにも、それから処分に関してもですが、市民の皆さんの信頼を回復していくことが非常に大切だと思いますので、今後、しっかりと処分も含めてやっていかなければいけないっていうふうに思っております。以上です。

(河村市長)

はい。ありがとうございます。

そしたら次に水野委員の方からお願いします。

(水野委員)

はい。水野でございます。

まずもって申し上げたいことは、私も先の委員の皆さま方からご発言がありましたとおり、この推薦名簿、金品授受、内覧、どれをどのように説明しても、市民の理解は到底得られないという事実。そして、名古屋市教育行政に対する社会からの信頼を少なからず失ったという事実。これを私も同様に感じているというところであります。

そして、報告書を拝読いたしまして、全てを受けとめているところですが、47ページに名古屋市教育委員会自身の無自覚さ、無責任さこそが、本件事案の本質とありまして、私は全くそのとおりであると強く同意をしております。この一件は、事務局や職員に限った問題と捉えては、本質を見失ってしまうように思っております。報告書の中には、長きにわたってガバナンスが発揮できなかった教育委員会の構造について触れられておりますけれども、私もこちらの方がはるかに重大な問題のように感じております。

そのうえで、まずすべきことは、まず私ども教育委員が、教育委員会制度の本旨を今一度正しく見つめ直すということだというふうに思っております。私達委員一人一人が、名古屋市教育行政を担う責任者であるという自覚を持つということが、まず一つ大切かなというふうに思っております。

今、社会から私達が期待されているとしたら、それは構造の変革を促すことだというふうに思っております。この期待には、何としてもお応えしていかなければならないというふうに思います。そのための第一歩は、まずは教育委員会自身が変わることから始めていきたいと、私はそのように思います。そのためにも、不断の研鑽に努めなければならないと、決意を新たにしているところであります。以上です。

(河村市長)

はい、ありがとうございます。

そうしたら次には教育長からご発言をお願いします。

(坪田教育長)

はい。この度は本当に申し訳ございません。調査検証チームの寺脇座長を始めとした皆さまには、2月19日のチーム設置以来、非常に限られた時間の中で調査検証を丁寧に実施していただき、再発防止に係る提言までを最終報告としてまとめていただいたこと、本当に深く感謝をしております。

教育委員会としましては、この提言の内容も含めた最終報告を重く、しっかり受けとめ、長年続いた不適切な慣習を断ち切り、市民の皆さまの不信や不安を1日でも早く払拭したいと、そして、信頼回復などができるように、教育長である私が先頭に立って、職員一丸となって速やかに改善に取り組んでいきたいというふうに思っています。

何より、今各教育委員の皆さまからもありましたように、教育長、そして5

人の各教育委員が、まさに主体性を持って、この提言を含めた再発防止策をしっかり具体化していくと。また各教育委員からも具体の提案をいただいて、それを実行できる形にしていくということで、教育委員会と事務局も一体となって、これに取り組んでいく必要があるというふうに思っております。

感謝申し上げますとともに、そういうことを誓立をいたしまして、私からの言葉とさせていただきます。

(河村市長)

はい。ありがとうございました。そうしたら一通り教育委員の皆さんの話が終わったところで、市長から発言をというふうに書いてありますので。

これどうしたらいいかというのはですね、本当に悩んでおります、これ。認識がちょっと僕らと、学校の責任というか。今水野委員の方から、ページ47のところの無自覚、無責任と、教育委員会の、本件事案の本質ということでレポートいただいておりますとありましたけどね。これもそうなんだけど、無責任って何が無責任で、学校の先生たちは何をやる仕事だと考えとるのかと、そもそもよく分かりますよ、これ。ただ義務教育6年、3年やっとして、ええ学校行かせると。親は親でそれなりに納得して高校入試もあると。それでいいんじゃないかとそう思っとなるんじゃないかね、これ。僕らだと一人の子も死なせないと言ってんだから、これはそういう受験戦争のレースの中で苦しみを感じた子ども達を助けないかん、応援せにゃいかんですよ、これは。応援しないと。心を寄せるなんて言いますが、いつも怒っとなるんだけど、心を寄せるのは、陛下の場合はありがたいことですがそれは。公務員は心を寄せとるだけじゃないかんですよ。応援しないと、そういう子どもさん達を。いうことなんだけどどうもそこが根本的に違ってんじゃないかと、先生の認識が。というふうに思わざるを得んですね、これ。

こんだけのことやっというて、まだ本当に、今年入ってですけど、毎月のように子どもさんが亡くなってますからね、これ。こんな悲劇を目の前にしてですね、何の提案もないと。10,000人も教師がおってですよ。ありうるのかとこんな話はということで、僕は市長の責任だと思っとなるもんで、どうしたらいいかということを実際に考えてます。情けないと、申し訳ないと、子どもさんに。過去に成績を苦にしてですね、命を自分で亡くならせるというような子どもさんに申し訳ないと。それは私らの仕事なんだと、義務なんだと、責任なんだという気持ちが、どうも教師にはないんじゃないかね、そもそも。そういうふうに思わざるを得んです。一定の成功した人はいいですよ。ええ成績取って、ええとこ行ければ。その子でも死ぬ子もありますけど。そうでないことで取って、これ義務教育ですから、義務教育で義務で受けとってですね、その子達を応援しないで済むという道理はないというふうに思って、根本的な意識がどうも違うんじゃないか、それか僕が違うんですかね、これ、どうも。こないだなごも

っかで色々言いました。あんまり教師のことを厳しく言うと、河村さんやりにくくなりますよまで言われましたけど。私、違うでしょうって教師の責任は。数学の先生だったら数学の授業やることだけなんですか、これ本当に。そうだったら今、塾の方が上手いと言われとるじゃないですか。どうなるんですか、これ一体、ということを感じております。

それから、座長からありましたけど、教務主任のあり方について、なるほどなあと思いましたね。学校の中で努力して、一人の子も死なせないなら色んなことも懸念しとる人じゃなくて、違うところで教務主任が選ばれて、その教務主任が選ばれたところは、すぐ次の学校へ行ってしまうということではいけませんよね、これ。民間の会社だったら、新たな製品を作るといことの色んな問題は、そのラインにおる人がちゃんと考え続けてかないかんのだけど、こんなことかと思いました。

それから教育委員会制度についても申し上げておきますと、これはアメリカのものまねなんですけども、別個の力を持っております。独立行政委員会ってありますけどそん中でも特に強い方で、人事なんかは教育委員会が別個に持ってるということだけども。残念ながら、仏作って魂入れずでですね、やっぱりアメリカの場合は、選挙やってますからね、これ教育委員の。だから重みが違うんですわ。だから今んとこ、教育委員会をそういう別個のものにしながら、魂を入れずに、形式的なものにしといて、教員だけで上手に自分勝手にやってきたと、というふうに思いますね、これ。だから、そこのところもしっかりやっていかないかんし。

やっぱ高校入試やっとなっちゃ駄目だな。僕の75年の経験からしますと、受験そのものをやっぱ廃止して、子どもさんには本当に好きなことをやってもらおうと。そういう可能性をみんなでプレゼントしていくと。小学校、中学校ずっとですよ。そういうふうに変えないと、やっぱ受験勉強の重荷が重た過ぎますわ、これ。色んなこと言ったって、そんなことより受験の方が大事だもんで、この間、菊井中学で言ってましたよね、子どもさんが。ドローンかなんかやったのがね。あんたどうだって、学校の受験とこういうキャリアタイムのような、まだモデルみたいなもんだけど、どうだって言ったら、楽しいけど、あれはドローンでなかったら、何やっとなった人だったかな、何かやっとなった人です、一応。クッキングじゃなかったと思うけど。それは受験の方が大事ですわ、そういうふうにバサッと言われました、生徒さんにね、菊井中学の。

ということでございまして、ありがとうございます。で、すいませんけども、やっぱ名古屋では一人の子も死なせないということと、昨日藤井君が将棋で勝ちましたけど、ああいう一芸に秀でた人間ね、受験ばっかやっとならずに、××大学行ったやつを、マスコミもめちゃくちゃ大事にしていますけど、あんな受験勉強が上手いだけで、何なんですかって本当に。そういう二面がありまして、一人の子も死なせないというのと、将棋の藤井さんみたいな色んな子を誕生さ

せるという両方の意味を、何とか名古屋市で実現していきましよう。

ちょうどここであってくのがええと思うけど、とにかく子どもにね、中学生にね、一番からドベまで順位をつけるなんてね、めちゃくちゃなね、私は実はその時代に生まれてきたのかな。その後、ちょっと勉強によって色んなこと知ったんですけど。キリストやお釈迦さんでもないのにね、中学生にね、あなたは1番で2番で、あなたはドベなんてどうして言えるんですか、そんなことは。まずそこからやめないと、私はいかんなどということ、教育長には盛んに、会うたびに言ったんですけどね。今までの仕組みというのがありますよね。この間、それを言ったら校長7人ぐらい来ましたが、7人のうち1人の校長は、河村さんそんなこと言うと、父兄にものすごい嫌われるよと。生徒も嫌うよと言ってますけど。そうなるとすると、社会そのものが間違っとりやせんかと。階級社会みたいなね、これ。それをぜひ皆さんと一緒にぶち壊していきたいと思っておりますので、教育委員会の独自性は、せっかく作ったやつですから、アメリカのものまねとしても、大いに守りながら、こちら側も大きな責任がありますから、市長側もですね、全公務員33,000人いますけど、教員が10,000人ですから、23,000人にも子どもを一人も死なせない大きな責任があると思いますよ、私は。

そんな気持ちで、強い気持ちで取り組んでいきたいと思います。この提言、色々書いてありますので、またしっかり読まさせていただきます、そういう気持ちでやっていきます。ありがとうございました。

そうしたら、一応今日の段取りはこういことでございます。

以上で総合教育会議を終了いたしますが、また随時、大テーマをいただいたということでございますので、皆さんと色んな議論を深めたいと思います。それでは、これで終了いたします。ありがとうございます。